不定期刊行　　第502号　2013.10.29

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

国体、笠原・中嶋組リード２連覇、ボルダリングも２位

10月3日～6日、東久留米市で実施された山岳競技で、長野県成年男子チームがリード競技２連覇という快挙を達成した。予選１位で通過した同チームは、決勝では最終組で登場。大歓声の中、笠原大輔選手が完登まであと一歩（個人１位）、中嶋徹選手が個人3位の成績を上げ、文句なしの圧勝だった。また、ボルダリング競技も中嶋選手が個人1位の活躍もあり、昨年に引き続いて２位となった。この成男の活躍で、山岳競技で長野県は天皇杯７位となった。同時に出場した少年男子も惜しくも入賞は逃したが、大健闘。今後が大いに期待される。（以上、長山協浮須国体委員長のコメントより）・・・ある筋からの情報によれば、他県の選手からも「あの二人が出ればもう勝ち目がない」とのコメントも聞こえてきたとのこと。それほどの圧勝に改めて祝福を送りたい。

静かなり、蝶ヶ岳、大滝山、徳本峠

12日から13日にかけては池工山岳部の山行を行い、来年度県大会の会場地蝶ヶ岳をメインにあまり行く機会のない大滝山から徳本峠を歩いた。初日上高地から入山し、梓川街道を徳沢まで行く。天気はいいが、風がある。一時的に冬型の気圧配置になったからであろう。風は冷たく、高曇りであった。徳沢を出発したのは10時45分、最初のワンピッチが荷物を背負った肩にはずっしりと重い。今回参加の生徒は４名。うち１年生が３名と若いメンバーだったが、弱音も吐かずにじりじりと登っていく。来年度の県大会時には2000m付近から雪上歩行になるので、感じはだいぶ変わるだろうが、この登りをメインで一度登っておけば必ずや来年は必ず役に立つはず。2ピッチ半で長塀山に到着した。ここまで来ればもうあとは楽勝だ。妖精の池に代表される窪地や池を随所に見ながら、15時にはテン場に着いた。そのころから、前線の通過の影響だろう、急速に冷え込み霰がバラバラと降りだし、猛烈な風が吹き始めた。西の槍穂はすっかり見えなくなったが、しかし安曇野方面をはじめ東、南方面はすっきりと晴れ渡り富士山まではっきり見えた。稜線上の強風の中でのテント設営は、いい勉強になったはず。計画では蝶槍まで空身でピストンする予定だったが、この風と霰の中、いったんテントを張ってしまえば、中は天国。今日は動くのをやめようということになった。結局風は一晩中吹き荒れていたが、そのおかげで降った雪も飛ばされた。

翌朝は風も収まり、すっきり晴れ上がった。6：00出発の予定だったが、出発の準備ができてから20分近く美しく雪化粧をした正面の槍穂の姿を眺めて全く飽きることはなかった。7：10大滝山北峰到着。県ヶ丘高校の松田さんから電話があった。県の山岳部は一日遅れで蝶に入ることになっていたが、ちょうど上高地に着いたところだとのこと。テン場の様子や上の眺望などを伝え、互いの安全登山を願った。大滝山荘は北アルプスでも古い山小屋の一つだが、夏の１カ月間しか営業しない。ここの営業期間がもう少し長ければ、またかつてあった徳沢を遡上する登山道が今でも使えたなら、県大会や北信越大会でも使えるのになぁと思いながら、立派な小屋の横を通り過ぎて、三角点の

ある南峰へ到着した。しかし、裏を返せば小屋が営業もせず、沢ルートが廃道になったからこそ、静かな山歩きが楽しめるという側面もある。そう考えれば大滝山を大滝山らしくしているこれらの要素も悪くない。上高地の裏にありながらこの静かな山域は貴重である。9：40 槍見台。先週の台風で葉は散ってしまったが、真っ赤な実をつけたナナカマドを前景にした槍穂は計算しつくされたかのようである。窪地や凹地を右に左に見ながら蝶ヶ岳から続く二重稜線は徳本峠まで続く。徳本の狭いテン場に色とりどりのテントがこれでもかというほど張られているのにはびっくりした。ここをベースに霞沢と大滝への登山者が多いと見た。ところで、徳本峠の展望と言えばやはり前穂である。高さでは勝る奥穂もここでは形無しである。圧倒的な迫力でかのウェストンをも唸らせた前穂の雄姿を十分に目に焼き付けて上高地へと下った。上高地到着は 14：30 分。

中信地区安全登山研修交流会

台風 27 号が太平洋沖を東へ進んでいるという情報の中、１０月２５日（金）夕刻から２６日（土）にかけて、木曽青峰高校で中信地区安全登山研修交流会を開催した。参加者は例年を大幅に下回ったが、内容は充実した。初日は気象予報士の花井嘉夫先生による「登山に役立つ気象の話」。もともと物理がご専門の花井先生の講演は、いくつかの実験も使いながら、高校生にもまた大人にもわかりやすい内容だった。雲や霧の発生するメカニズムをペットボトルの中で再現したり、寒気と暖気が混じる部分で前線が発生する原理を色水を使って目に見える形で示したりしながら、あっという間に予定の 90 分が終わってしまった。生徒たちは、ペンを片手に低気圧への吹き込む風の方向を書き込んだり、雲の映像を見ながら観天望気を体験したりと、実際の登山の場面を思い浮かべながら、気象に対する知識を深めることができた。その後の交流会も盛り上がり、その中で「参加人数は少なくとも来年以降も続けよう、続けることに意味がある」と参加者はみな前向きだった。来年も面白い企画を考えたいとは、事務局の今滝さんの言。翌日はなかなか登る機会のない南木曽岳に登ろうという予定だったが、天候の回復が遅れたため、登山は中止とせざるを得なかったのは、残念だった。

編集子のひとりごと

いつまでも炎帝が居座り、秋の訪れが遅く台風が次から次へと襲ってきた 10 月だった。その間隙を縫って小生は結構充実した山行をいくつか行った。17 日、県高体連の次年度下見で蝶ヶ岳に再び登り、槍穂高の勇姿を拝むことが出来た。19 日には下伊那松川青年の家の企画した「初心者のための登山教室」の講師で」飯島町の烏帽子ヶ岳に登った。下見で 6 日にも登ったが、普段とは違うメンバーと登るのもまた楽しかった。もう一つ、ひょいと思い立って奥又白の池に行って来た。かつてのクライマーのＢＣはすっかり趣を変え、今や中高年の登山者がガイドに連れられてテント泊まりで訪れる場所になっていたのにはびっくりした。しかし、池が周囲も含め大分きれいになっていたのに二度びっくり。（大西　記）

奥又白の池